

# 子どもと楽器の出会いのプロセス —幼稚園の音楽活動と 小学校器楽教育の接続に着目して—

樫下 達也・平井 恭子・櫛山 ゆかり\*・  
高野 史朗\*・中東 静香\*・古賀 松香

Process of Encounters between Children and Musical Instruments:  
Connections from Music Activities in Kindergarten and Instrumental Music Education  
in Elementary School

Tatsuya KASHISHITA, Kyoko HIRAI, Yukari HAZEYAMA, Shiro TAKANO,  
Shizuka NAKAHIGASHI and Matsuka KOGA

*Accepted June 22, 2020*

**抄録：**本実践では、幼児教育における音楽活動と、小学校音楽科の器楽教育との接続の在り方を探ることをめざし、「子どもと楽器の出会い」に着目した保育を展開した。具体的には、幼稚園において、5歳児が「音のなるモノ」や未知の楽器と出会う場を設定し、自由保育における試行的活動の合間に同じ楽器を用いるコンサートや音遊びワークショップを実施した。その中でどのように「音のなるモノ」を楽器として認識し直し、音楽表現への興味を高めていくのかを考察した。

**索引語：**幼小接続、音遊び、器楽教育

**Abstract:** This study examined activities in early childhood education centered on “encounters between children and music” to explore the state of connections between music activities in kindergarten and instrumental education in elementary school music subjects. Specifically, in kindergarten, children were given opportunities to encounter “things that make sound” and as-yet-unknown musical instruments, and educators conducted concerts and workshops in parallel with exploratory activities during free-play time. The study considered how, in this setting, children reinterpret “things that make sound” as musical instruments and develop their interest in musical expressions.

**Key Words:** Transition from preschool to elementary school education, Sound Play, instrumental music education

---

\* 京都教育大学附属幼稚園

## 1. はじめに

本実践では幼児教育における音楽活動と、小学校音楽科の器楽教育との接続の在り方を探ることをめざし、「子どもと楽器の出会い」を主軸とした保育を幼稚園において展開した。本稿はその試行的な取り組みの報告である。

まず、幼稚園の教育（保育）において音や音楽に関してどのようなことが求められているのか確認しておこう。『幼稚園教育要領』の「ねらい及び内容」の「表現」のうち「音」に関わる記述として、次の3点をあげることができる（文部科学省，2017a，17）。

- A) 「生活の中で様々な音，形，色，手触り，動きなどに気付いたり，感じたりするなどして楽しむ」こと
- B) 「感じたこと，考えたことなどを音や動きなどで表現したり，自由にかいたり，つくったりなどする」こと
- C) 「音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」こと。

「音」や「音楽」に焦点を当てるならば，Aは生活の中の音に気づき自分の内に受け入れていくこと，Bは自分の内的なものを音に託して表現することが記述されており，Cは組織化された音，すなわち音楽の活動の楽しさを味わうことが示されている。この三つの内容はどのような関係にあるだろうか。まずAで様々な音と出会い自分自身の中に受け入れ，その経験に即して音への感受性を獲得する。そのうえで，Bで感じたことや考えたことを表現する手段として音を活用する。AとBは相互に補完し合う関係にあるといえる。ここでの経験を基礎としながら，Cに示されたように，音楽の初歩的な技能を身につけながらそれを楽しむ経験がなされるべきであろう。つまり三つの内容は(A ↔ B) → Cの順に展開していくことが想定されていると考えられる。とすれば，AおよびBの内容は幼児教育の場のみならず，義務教育段階以降の種々の音楽活動の全ての基礎とも位置付けられ，音楽教育の根幹をなす重要な内容といえる。

ところが，幼児教育の現場では，子どもの音との出会いに十分な注意を向けた保育が行われているとはいえないのが現状である。音楽活動の取り組みに熱心な園では行事等での「お披露目」を目指した訓練的な楽器指導が行われるなど，生活経験とは全く切り離された音楽活動，とくに器楽活動が行われる傾向があることもこれまで指摘されてきた<sup>1)</sup>。ともすれば楽器演奏技術を訓練し，見栄えの良い合奏を完成させることに保育者および教員と保護者の関心が向き，子ども自身の音楽演奏表現への意欲や興味は二の次になってしまう傾向である（大山，1996，103）。日常の生活経験の中で触れる音の数々に対する感性を磨かれずして行われる訓練的な音楽活動に，子どもの自発的な表現の発露が期待されるとは到底考えられない。

こうした「技術至上主義」とも言える課題は幼稚園や保育所における音楽活動だけの問題ではない。小学校における器楽教育でも同様の指摘は繰り返されてきた。こうした共通の課題がある一方，幼稚園における音楽活動と小学校における器楽教育の接続はまだまだ進んでいない。近年は音楽づくりや歌唱分野における保幼小接続に関する研究（佐野ほか2016，板橋2018など）や，小学校学習指導要領及び幼稚園教育要領に着目した提言（今井，2019）などがあるが，器楽分野に焦点化した実践的研究は今後の蓄積が待たれる<sup>2)</sup>。

しかし，多くの子どもが幼児教育あるいは保育の場ですでに楽器と出会い，それを前提に小学校音

楽科の授業が展開される、という現実を鑑みれば、器楽活動に着目した幼小のスムーズな接続の問題を考えることは喫緊の課題である。また、2017年告示の小学校学習指導要領では「幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連」を考慮した低学年の音楽科教育が求められており、「幼児期に自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたこと」が小学校教科学習へ円滑に接続される必要性が指摘されている（文部科学省，2017，120）。

以上から本研究の目的を、幼稚園の音楽活動と小学校音楽科の器楽教育の接続を前提に、幼稚園における「子どもと楽器の出会い」の適切な在り方を探ることとする。

具体的には、園児が遊びながら「音のなるモノ」を「楽器」として認識し直すプロセスを観察し<sup>3)</sup>、園児の音楽表現への意欲を高めることができる「保育の場」はどのようなべきかを音楽科・幼児教育科教員・幼稚園教員の協働により明らかにしたうえで、それが小学校音楽科教育の器楽教育へとどのように接続されるべきかを考察する。

## 2. 実践の概要

### (1) 実践の年間スケジュールとねらい

実践は2019年5月から2020年2月までの期間実施した。対象は京都教育大学附属幼稚園5歳児である。この実践は京都教育大学平成31年度教育研究改革・改善プロジェクト経費「幼稚園の音楽活動と小学校器楽教育の接続：『園児と楽器の出会い』のプロセスに着目して」の一環として行われた。研究に参加したメンバーは、附属幼稚園の教員3名（5歳児クラス担任2名，3歳児クラス担任1名），京都教育大学幼児教育科教員2名，同音楽科教員1名である。

1年間のスケジュールを表1に示した。ねらいは大きく二つである。一つ目は「音のなるモノ」を使った音遊びの期間を十分に取ることである。保育の場，小学校教育の場では突然「楽器」が子どもたちに「与え」られ，取扱上の注意や演奏方法などが「おやくそく」として提示されるのが定石である。しかし本実践の参加メンバー全員に共通する問題意識は，幼児教育において楽器があまりにも特別視されその出会いが「堅苦しい」ものでありすぎること，そのために子どもたちに無用な緊張感を与え自由な表現を阻害しているのではないか，ということであった。そこで，まずは「音のなるモノ」で十分に音への興味を引き出し，「どのようなにらせばどのような音になるか」（＝奏法と音色の関係）や，「どのような形状や素材のモノからどんな音になるか」（＝形状や素材と音色の関係）などに注目させつつ，「音をならす喜び」を体感し，そのうえで楽器と出会うようスケジュールを立てた。

具体的には5月以降，空き缶やダンボールを用いた音遊びの活動を展開，9月以降はこれらを集めた音遊びコーナーを設置，音のなるモノとして竹を追加し，モノをならすためのマレットを数種類置いた。11月以降には音遊びコーナーに小さな民族楽器類を投入した。金属製や木製の小さな打楽器がメインである。ここで初めて子どもたちは「楽器」に出会う。そして，1月以降，オルフ楽器の鉄琴と木琴を追加し，少しずつ楽器を増やしていったのである。このように，音のなるモノを探求する5月から10月を前期，楽器と出会う11月以降を後期として子どもたちの変容を観察することとした。

ねらいのもう一つは，日常的な自由遊びを継続しつつ，意図的・組織的な活動を挿入したことである。ワークショップやコンサート形式の「イベント」を挿入することで子どもたちの音遊びや楽器遊びにおける遊び方のヒントを提供し，探求活動を促すことをねらった。6月の音遊びワークショップ

や12月の音遊びコーナーの楽器を使った即興パフォーマンス、1月のオルフ楽器のワークショップなどがこれにあたる。また、自由遊びから生まれてきた子どもたちの活動を園の行事に組織化することも試みた。例えば、10月の運動会におけるパレードは、自由遊びの中で子どもたちから自然発生的に生まれてきたパレードごっこを運動会で披露できるように場を設定した結果のものである。また3月の「子ども劇場」のお話づくりにおける音楽づくりや効果音づくりも、自由遊びの中で子どもたちが経験してきた音や楽器の表現を劇の中で活かせるよう、あとから組織された活動に取り込んだものである。したがってこの10月の運動会のパレードと2月の子ども劇場の活動は、当初から計画していたものではなく、実践の進行に伴って自然に生起してきた活動である。

表1. プロジェクト研究「子どもと楽器の出会い」年間実施スケジュール

| 時期  | 実施内容                                          | 活動の場       | 概要                                         |
|-----|-----------------------------------------------|------------|--------------------------------------------|
| 5月  | ・ALTと太鼓作り                                     | 保育室        | 手作り楽器：空き缶で作った太鼓、割り箸の撥                      |
| 6月  | ・音遊びワークショップ<br>・自由保育での空き缶、ダンボール、ペットボトルを使った音遊び | 遊戯室<br>保育室 | 幼稚園共同研修会。<br>サウンドスケープ、空き缶やダンボールを使った音遊び。    |
| 7月  | ・自由保育での空き缶、ダンボール、ペットボトルを使った音遊び                | 保育室        |                                            |
| 9月  | ・音遊びコーナー設置<br>・自由保育でのコーナーでの遊び                 | 音遊びコーナー    | 空き缶、段ボール、各種マレット、竹                          |
| 10月 | ・運動会でパレード<br>・自由保育でのコーナーでの遊び                  | 音遊びコーナー    | 音の組み合わせたものでならず音楽に合わせて練り歩くパレードのお披露目         |
| 11月 | ・音遊びコーナーに楽器投入                                 | 音遊びコーナー    | 小さな民族楽器をコーナーに追加                            |
| 12月 | ・音遊びコーナーの楽器を使った即興パフォーマンス                      | 遊戯室        | 音遊びコーナーの楽器を用いて京都教育大学音楽科の学生と教員が即興パフォーマンスを実施 |
| 1月  | ・オルフ楽器のワークショップ<br>・音遊びコーナーにオルフ楽器を投入。          | 遊戯室        | オルフの鉄琴・木琴、小さな民族楽器類                         |
| 2月  | ・子ども劇場のお話づくり                                  | 遊戯室        | お話づくりの過程で効果音やBGMを考える中で音のなるモノや楽器を使う。        |

## (2) 各イベントの概要

### 1) 身近なもので音遊びをするワークショップ

6月5日に幼児教育協働研修<sup>4)</sup>の一環として行った。ワークショップのファシリテーターは大学の音楽科教員が務め、5歳児担任が補助として参加した。60分間で表2のプログラムを実施した。

音そのものや、音をならすことの面白さを体験してもらい、音への興味を引き出すことを目的としている。周りの音に耳をすませたり、音の数を数えたり、すでに子どもたちが日常の自由遊びの中で親しんでいたカンカンを使った。またこの時初めてダンボールで音遊びを行った。

### 2) 楽器を使った即興パフォーマンス

12月11日に大学の音楽科教員2名と学生2名が実施した。この1週間前に音遊びコーナーに新しく設置した種々の小さな民族楽器を使い、即興的に音楽を構成して子どもたちに披露した。即興演奏にあたっては、音の強弱やテンポ感の緩急、リズムの変化、音と音の間（ま）、などを大切に、他の演奏者とのコミュニケーションの方法として目を合わせることや息を合わせることなど様々なバリエーションを含めるように意識した。子どもたちは大人たちの演奏を食い入るように見つめ、ならされる音に聞き入っていた。

表 2. 音遊びワークショップのプログラム

| 活動テーマ                      | 活動内容                                                                                       |
|----------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1) 大きい声、小さい声               | 子どもたちがファシリテーターの名前を大きな声や小さな声で呼び、ファシリテーターはそれに応じた声で応答する。                                      |
| 2) まわりの音を聞こう (サウンドスケープ)    | 部屋の中と外の音に耳をすませる。<br>気づいた音について話し合い、可能であればその音を聴き直して確かめる。                                     |
| 3) どっちから聞こえる？<br>(音のかくれんぼ) | 子どもたちは目を瞑っている間にファシリテーターは室内を移動してティンシャ（響きの豊かな小さな金属製の楽器）をならす。子どもたちは目を瞑ったままどの方向から音が聞こえたのか指を差す。 |
| 4) 音が止まったら・・・              | 響きの豊かな楽器をファシリテーターがならす。子どもたちは楽器がなっている間だけ動き、音が止まったら自身の動きも止める。                                |
| 5) いくつ聞こえる？                | ファシリテーターが手を打つ。1回なら～、2回なら～3回なら～というルールで遊ぶ。                                                   |
| 6) カンカンで音遊び                | 空き缶（クッキーの缶など）やそれを加工して作った太鼓を用いる。<br>真似っこしてならそう／色々な音探し                                       |
| 7) ダンボールで音遊び               | どんな音がするかな？／真似っこしてならそう・・・叩く、こする<br>ふた組に分かれてならそう                                             |

その後、子どもたちのうち、普段から熱心に音遊びをする数人がその場で即興的に音楽を奏でた。興味深いのは、子どもたちは各自がなんとなく勝手に音をならしているようでいながら、同じ空間に音をならす者同士、互いを無視するわけではなく、ある者が一定の拍感をもった音を継続的にならすとそれに同期して音をならす者がおり、だんだんと強くならす者があればそれにつられて全体の音もだんだんと強くなっていく、という現象が起こっていたことである。アンサンブルの原初的な様相がそこに生じた。この子どもたちの即興演奏で最も難しかったのは「終わる」ということのようにであった。演奏をどのように終わらせるかを相談していなかったために、いつまでも音がなり、ならしている者同士も「終わらせる」必要を感じつつ互いに目を合わせるがなかなかやめられない。音楽（演奏）を「終わらせる」ことの難しさを改めて感じさせる一幕であった。

### 3) オルフ楽器のワークショップ

1月22日に実施した。大学の音楽科教員1名が子ども向けにオルフ楽器の木琴と鉄琴を用いたワークショップを行った。木琴や鉄琴でオスティナートを奏で、それに合わせて「木琴さん、木琴さん…」とわらべ歌風の唱歌を歌った。オルフ楽器の特徴である木琴や鉄琴の音板を抜く機能を活用し、それぞれの楽器でオスティナートに必要な音板だけを残して演奏した。補助として入った5歳児担任を含め、子どもたちも教員も皆がオルフ楽器の音の美しさを味わっていた。大人がその楽器の音色の美しさを感じ入る様子に影響を受け、子どもたちもまたそれを味わう様子が見られた。

## 3. 5歳児担任が観察した子どもの変容

前節までに示した組織的な実践と並行して、日常の自由保育の時間にも子どもたちは、音遊びコーナーや保育室に置かれた音のなるモノや楽器を使って自由に遊びを展開した。ここでは5歳児担任が観察した子どもの変容について時系列に沿って報告する。なお、事例に登場する子どもの名前は全て仮名である。

## (1) 前期：モノの「楽器化」(5月～10月)

### 1) 音のなるモノとの出会い (2019年5月)

2019年度は大学との協同プロジェクトである『「園児と楽器の出会い」のプロセスに着目して』と、幼児教育協同研修での公開保育の機会を得た。5歳児担任としてこれらに取り組むに当たって、子どもの生活の中にある音環境を見直し、生活の流れの中に、取り入れていくことを計画した。また、上記のプロジェクトが開始される前の5月に、グローバル人材育成プロジェクトのゲストティーチャー(ブルキナファソ出身の先生のALT)との交流が計画されていたため、これとも連動することができないかと考えた。そこで、ALTにゲストとして迎える日に、ブルキナファソの子どもの遊びである「缶太鼓」で遊ぶことを決め、家庭に協力してもらい缶を集めることにした。その中では、素朴な音との出会い、ALTの奏でる独特のリズムを身体で感じてほしいと願っていた。

ALTとの交流日、家庭から持ってきてもらうことにした缶を置くため、保育室の真ん中に細机を出しておくと、登園してきた子どもたちが「こんなん持ってきた」と、細机の上にそれぞれの缶を置いていった。徐々に、缶の数が増え、数名の子どもが、缶を手で叩いて遊び始めた。

そのうち、ハルト「(缶によって)音が違う!」。マサト「なんか違う!」と気づいた。確かにビニール系の蓋付きの缶や、大きな缶、小さな缶、太い缶、細い缶と、素材や大きさが違うことで、叩いた時の音が違った。音の違いがより明瞭になるように叩くための割り箸を用意すると、早速、チカラ、ハルト、ヒビキ、サキ、マノカ、アヤメが並べてある缶を、割り箸で叩いて遊ぶ姿があった。サキ「わかった!」「これカン!て言う」「こっち(ビニール系の蓋付きの缶は)ポン!や」「太鼓(ポン!)ばかりこっちに集めよう!」と言う。ハルトは、「これ不思議や」「おんなじ缶やのに、音が違う。ほらな」と叩いてみせる。「色が違うしちがう?古さがきつと違うはず」などと、そのモノの特性による音の違いに関心を向けている。

次の日も、登園してすぐに、昨日興味を持った子どもが、缶を割り箸で叩いて遊び始めた。サキ、ヒビキ、マサト、ヤマトが「先生ほら」と缶の上や横など色々な部分をたたき、同じ缶でも叩く場所によって違いがあることを教師に伝えてくる。ヒビキ「ほら、ここ(缶の上)は高い。ここ(横)は低い」と音の高さへの気づきを伝えてくる。ヤスコは、割り箸の動かし方を横にしてギロのようにならしてみる事を繰り返し試している。個々の子どもが、缶(モノ)に向き合い、自分の興味の向いたことから、試し続けている。サキが、「ここは(蓋の部分)はボンで、ここ(横)はカン!」と叩く場所による音の違いを言葉で表しながら、叩いて見せる。

教師が、「♪ボンボンカンカン、ボンボンカンカン…♪で感じやね」とリズムに合わせて声をかけ



図1. 缶(モノ)との出会い



図2. 個々の気づき

ると、それが楽しくなって、上、下と叩くことを繰り返す。暫くすると、ヤスコが歌を歌い始め、その歌に合わせ、その場のみんなで音をならす遊びが始まった。新たにやってきた、ミナト、サトヤは缶と割り箸を持ち、缶を叩きながらリズムに合わせて、歩くことを楽しみ始めた。この、ミナト、サトヤの遊びが広がり、「パレード行ってくる」と5、6人で連なって缶を叩きながら、園内をねり歩く遊びになっていった。

## 2) その後の展開

個々が音を探求したり、友達と何人かで、チケットや会場を作り、友達と音楽会ごっこをしたりするなど、形を変えて音の遊びが継続していった。また、缶だけではなく、6月の幼児教育協同研修をきっかけにして、段ボール箱、ペットボトル、竹など新たな「モノ」で音をならすことを遊びの中に取り入れていった。段ボールに座って叩いてみることや、缶やペットボトルを竹の棒でたたくなど、存分に試すことで、素材による音の違いを捉えたり、力の入れ具合により破壊、変形すること、音の大きさが変わることなどの感覚を身につけたりしていった。

ミナト、サトヤから始まったパレードごっこは、次第に人数が増え、リズムに合わせて歩くことを楽しんでいった。この姿を、全員経験とするために、運動会のプログラムに取り入れることにした。曲は様々に試してみても、子どもが動きやすかった「ガランピーダンス」を使用することにした。一人で、自由な発想でリズムに合わせる楽しさの経験に加えて、友達の真似をすることでリズムを通して人とつながる感覚を経験することをねらいとした。そこで、曲に合わせて缶を叩きながら自由に歩く、4人のグループで並んで歩く、先頭の人の真似をする、先頭を交代する等の取り組みを、子どもの様子を見ながら行った。子どもは、運動会の練習というよりも、音楽に合わせて歩くことが楽しくて、日々活き活きと取り組む姿が見られた。

## (2) 後期：楽器との出会い（11月～2月）

### 1) 子どもと打楽器との出会い（2019年11月21日）

身近な缶や箱などを楽しむことから、本当の楽器の音の美しさにも触れて欲しいと願い、打楽器を出した。興味をもった子どもが多数やってきて、それぞれにならしてみよう。友達と同じ楽器を叩いてみて、どんな音が出るかを友達と話しながら楽しむ子どもや、一人で端から順番にならしてみよう。どんな音が出るかを試す子どもがいる。教師は叩き方を知らせなかったが、丁寧に扱う子どもが多い。

片付けの後、全体の活動の際に、楽器で遊んでいた子どもが、クラスの皆に見せたいと声が上がったので、その機会を作った。楽器を試すことを楽しみながらも、遊戯室のステージ上で演奏するこ



図3. 音楽会ごっこ



図4. パレードごっこ

とで、舞台に立っているような感覚になり、見てもらうことが嬉しい様子であった。

その後、クラス全員で好きな楽器をやってみるようになった。中には扱いが雑になる子どももいたが、周囲の子どもが「あかんで！壊れるで！」と伝えていた。ヨウヘイはチャフチャス（棒タイプ）をひもだけ持ってぶら下げたように持ち、手でブランコのように揺らしてならしてみる。コトミは、スティールタンドラムを叩きながら、急に持ち上げ、楽器をひっくり返して中の空洞部分を覗く。教師が「なんで中みてみたん？なんか入ってると思った？」と聞いてみると、「うん」と答え、なぜこんな音になるのかを不思議に思っている様子だった。

## 2)「音楽に合わせて体を動かし、それに合わせて音楽をならす」(2019年11月27日)

遊戯室では音が反響して混ざってしまい、せっかくの楽器の音がよく分からなくなってしまう。またクラスを超えてどの子どもも興味をもってやってみてほしいという願いもあり、さらにそれまでも4歳児や3歳児を招待する姿が多かったことなどから、全学年が目にする場所に畳を敷き、音遊びコーナーを設置して打楽器を移動させた。

音遊びを楽しんでいた子どもが登園後からやってきて、それぞれで楽器をならして楽しむことを楽しんでいる。教師が「どんな音に聞こえる？」と聞くと、「ポンや」「外側はカン！やけど、中はコロコロや」など、それぞれの楽器の音がどう聞こえるかを自分なりに言葉で表現していた。マルチトーンタングをならしていたミナトが「ガイコツの音や」と、擬音語ではなく、そこから発想したイメージで表現した。教師が「ガイコツ！？おもしろいな！ガイコツが動いてる音やな」と、ミナトの考えたことを認めると、ココミは「ガイコツダンスできるやん」と、言った。それを聞いたミナトがリズムカルにマルチトーンタングを叩くと、サトヤが両手を振り、両足をばたつかせる動きでガイコツのダンスを表現し始めた。それをみた周囲の子どもは、自分の持っている楽器をサトヤの動きを見ながらならし始めた。

それぞれの子どもが楽しみながらならしていた音が、ミナトの発想から徐々に一つの音楽になっていった。音楽に合わせて体を動かし、その動きに合わせて音が合わさっていく様子は、互いを意識しながら音を合わせる合奏などの集団での音楽活動の始まりのように見えた。

## 3)「音からイメージしたことをつなげてお話にする」(2019年11月28日)

前日に楽器の音を擬音で表現したり、音からイメージを発想したりしていた。この日は、チャフチャスを強く降り、「雨の音！」と言ったり、ボンゴを叩いて「恐竜が来たぞー」と言ったりするなど、音からイメージしたことを言う様子が多かった。中には、チャフチャスを4本束で持ち、とてもゆっくり上下に振り、「カラスが飛んできた音になる」と言ったり、カリンバの特定の2音だけをならし、「玄



図 5. それぞれに楽器を試す



図 6. ガイコツダンスに合わせて楽器をならす

関のピンポンに聞こえへん？」と言ったり、新しい楽器のなりし方でなった音からイメージを膨らます子どももいた。教師が「ピンポンの次にその太鼓（ボンゴ）ならしたら、恐竜がやってきたってことになるな」と子どものイメージをつなげると、「じゃあ、そのあとにカラスもやってきたってことな」と、それぞれが自分の考えたものを続きにつなげ始めた。しかし、子どもだけではバラバラになりそうだったので、教師がナレーションのようにすることでそれぞれのイメージがつけられるかもしれないと考えた。教師が「あるところにカラスのおうちがありました」というと、チャフチャスでカラスの羽音を、「そこに大きな足音が聞こえて恐竜がやってきました。」という、ボンゴを強くたたいて恐竜の音を、「恐竜は玄関のチャイムを押しました。」という、カリンバでチャイムの音を、「カラスがドアを開けると雨が降っていました」という、チャフチャスを強く降って雨の音を…のように、音から考えたイメージでのお話ができていった。何度か繰り返すと、お話を進める役も子どもが始め、更にお話を続けたい思いから、音から色々な発想をしたり、新たな奏法を考えようとしたりするようになった。

#### 4) お話から音を考える（2019年12月3日）

この日はお話を考えることが大好きなが音遊びの場に来ていた。前週のようにお話をつなげていると、ヤスコは「次には洞窟がありました。大きな音がしたのでびっくりすると…」と、どんどん続きのお話を考え始めた。そこでは、音からの発想ではなく、先にお話があるため、「真っ暗洞窟の音どうする？」と、どのような音を効果音にするかを相談する様子が見られた。「これはさっき虹の音で使ったし…」「お花畑はこっちの音の方がいいから、こうやってならそう」と、自分のイメージではなく、ヤスコがお話の続きを考え、他の子どももそれに合うような音を考え始めた。この姿は、音作りの活動に向かっていく様子だと感じた。

#### 5) お話から音を考える（2020年1月15日）

数人の女兒がお姫様ごっこで遊んでいた。2学期に音からお話を、お話から音を考えることで楽しんでいたことから、3学期にもお話と音を考える様子があり、お姫様ごっこにも取り入れていた。この時は、「風の魔法はこの音ね」「逃げてるときに、石でこける音がこれにしよ」と、お話の流れも効果音も子どもが考え、教師は出てきたアイデアを共通で理解できるようにつなぐのみの援助だった。子どもの力でどんどん話や音が考えられていき、友達を呼んで、観てもらい劇遊びにも展開した。これまで音そのもので楽しむこと、音からイメージすることの経験が積み重なったからこそ見られた子どもの姿だと感じた。

幼児の世界はまだ未分化であり、全てを含んで楽しんでいる。これらの活動を、音を探すだけ、体を動かすだけ、お話を考えるだけ、と活動を分けてしまえば、子どもがここまで楽しんで音で遊ぶことは難しかっただろう。いろいろな活動が合わさって楽しくなることで遊びが深まり、同時に音への探求も深まっていった。

### (3) 変容の考察

5歳児の変容のエピソードから、音遊びへの援助として意義のある方策を3点からまとめる。

#### 1) 園児が楽器と出会う前に身近な「音のなるモノ」による音の探求活動を十分にとることの意義

本実践では音遊びコーナーに空き缶、ダンボール、竹などを置いて園児が自由に遊べる環境を準備した。身近なモノの扱いを通して、園児は「奏法による音色の違い」「素材による音色の違い」を捉え、楽しむと同時に、「モノの扱うことによる破損、変形」についても合わせて十分な体験をした。

これにより、実際に「楽器」が投入された後も、園児たちは引き続いて「より美しい音色、より自身が発したい音色」の探求を続けると同時に「音のなるモノ」に比して美しく鳴る「楽器」を大切に扱い、その音色を楽しんでいた。それは音楽文化の所産としての「楽器」に対するある種の感動の体験であると同時に、それに対するリスペクトの表明とも取れる言動と行動であった。

こうした体験は身近な「音のなるモノ」による発音の追求体験が十分にあったからこそその成果であると思われる。この知見は、「最初からルールとともに楽器が与えられる」のが定石となっている小学校以降の音楽科音楽教育のあり方に一定の示唆を与えるものである。

## 2) 大人の音楽文化のモデルの提示

本実践では日常での継続的な自由遊びの中で音のなるモノや楽器で遊ぶ時間をとる一方、大人がワークショップで音遊びを例示したり、即興演奏で組織化された音としての音楽を演じてみせたりするなど、同じものを用いた「音への働きかけ方」や「音楽文化」のモデルを提示した。これらの「イベント」の存在によって、子どもたちの遊びは少しずつ変化し、音色の探求に向かう子ども、他者と音をならす面白さに向かう子どもが現れた。単に「音」をならす面白さを体験した先に、「音の美しさ」の追求や「自分の出したい音」の追求があり、それらを組み合わせて「音楽」や「具体的なイメージに沿う音」（効果音）の追求へと変化していったのである。その過程に、大人の側が考える「美しい音」の提示や「面白い音の組み合わせ」の提示は欠かせない。決して押し付けるのではなく「提案」の形で子どもたちに見せることにより、子どもたちの側も抵抗なく、むしろある種の「憧れ」をもって音の探求を深めていった。「自由である」ということと並行して、大人の側の考える価値基準で見た面白さや美しさの提示は、子どもたちの美的感覚の成長には不可欠のものであるといえよう。

## 3) 自然に発生した遊びを意図的な保育へ組織化する意義

子どもたちの自由遊びによって生み出されてきた遊びから、探求の方向をみとり、組織化することはとても重要な意味をもつ。本実践では、運動会におけるパレード、子ども劇場における効果音の追求がそれにあたる。5歳児担任は、子どもたちの日常の遊びで生まれたパレードごっこに着目し、これを一部の子どもの遊びからクラス全体の遊びへと広げること成功した。また子ども劇場の取り組みでは、音の探求の中で出てきた「音に付随する具体的なイメージ」を取り出しながらお話を構成した。いずれも「お披露目」を前提とした訓練的指導の結果ではなく、子どもの自由な発想から引き出された表現の結実であることに意義があるといえよう。



図 7. 音からお話を考える

#### 4. 他学年の園児への影響

本実践は5歳児を中心としているが、継続的な実践の結果、幼稚園全体の環境に対しても影響が広がっていった。ここでは他学年の園児を中心に、園全体への影響について報告する。

##### (1) 3歳児への影響

主に5歳児でおこなっていた音遊びの様子を見聞きしていた3歳児担任も、子どもが普段の園生活で音に気がつく姿に、これまで以上に着目するようになった。

3歳児たちは、5歳児が、全園児共有の場である中廊下で音遊びをしている様子を見たり、音楽会ごっこに招待してもらったり、2学期に運動会でパレードをする姿を見たりすることから、何をしているのかと興味をもったり、「本物（の楽隊）みたいやなあ」と憧れの気持ちをもったりしていた。

そのような間接的な音遊びの経験を経て、3学期になり、節分を契機に鬼になってごっこ遊びをした際、鬼の歩く力強い感じを出すことをイメージしながら遊べるよう、動きながら音を出せる楽器である手持ちの和太鼓パーランカーを用意することにした。

鬼になって遊んでいたアキノリ、タクを誘って一緒にパーランカーを準備し、教師が手にパーランカーとバチを持って音をならしながら歩いてみた。それを二人は楽しそうに見てから、教師と同じようにパーランカーをならしながら歩き出した。4歳児の近くを通ると「鬼が来た!」と4歳児が驚いて逃げてくれるので、「鬼だぞ～」とすごみながらねり歩くだけでも楽しく、繰り返し保育室周りのテラスを歩いた。その様子を見ていたユウセイは、アキノリとタクが一通り遊んでパーランカーを置いて別の遊びに行くと、パーランカーを持ち出し遊び出した。しばらくすると、立方体のソフト積み木を並べて置き、一つの積み木に一つのパーランカーを置いて、ドラムのようにして叩き出した。並べた順番に叩こうとしているようにも感じられた。しばらく一本のバチで楽しむが、ふと思いついたのか、バチを一本ずつ両手に持って叩き出す。その楽しさにつられて、ユウキやアユもやってきて、同じように楽しむ。そのうちに、ユウセイは手でも叩き始める。鬼のごっこ遊びの道具としてよりも、叩くこと自体を楽しんでいる様子だった。

翌日もまた子どもたちは鬼になってパーランカーを楽しみ始めた。人数が増えてきてパーランカーが足りなくなったことを契機に、色々な音に触れられるようにと、5歳児が中廊下での音遊びで使っていた竹を用意することにした。50cm程度の竹を3本用意して、並べて置くと、パーランカーと一緒に竹も叩き始めたタクミ、ユウキ、ツヨシ、イロハ、ハヤテ。最初は叩くこと自体を楽しんでいたが、ある子どもから「鬼のパンツ」が良い」という声が聞かれたので、教師が歌を歌うと、その歌



図 8. たくさん並べて叩くことを楽しむ

を感じながら、好きなように叩くことを繰り返し楽しんだ（「鬼のパンツ」や「まめまき」は節分の前後からクラスで繰り返し歌っていた）。物珍しさからの興味が落ち着いて、続けてしたい子どもが数名になると、ツヨシがパーランクーと竹を並べ替えて一人で叩き出した。教師が「鬼のパンツ」を歌うと、正確ではないものの、旋律やリズムに合わせて叩こうとする姿も見られた。その後、しばらく、「鬼のパンツ」や「まめまき」など、鬼をモチーフにした歌で繰り返し叩くことを楽しんだ。

さらに翌日には、鬼になることよりも叩くことに楽しみが移っていったことを踏まえ、鬼がモチーフになっている歌に限定せず、ゆったりと無理なく歌え、1学期から繰り返し楽しんできてなじみのあるわらべうたを取り入れることにした（「ひとやまこえて」「かきのはかえろう」「いっちくたっちく」「さよならあんころもち」など）。教師がゆっくりと歌うと、始めは好きに叩いていたが、次第に歌の一音ずつに合わせて叩く姿が見られるようになっていった。何度か歌を変えながら歌っていると、そのうちに子どもたちから「次は“かえろうかえろう”がいい」と、自分が好きな歌を歌ってほしいなど、繰り返し楽しんだ。

さらに、色々な楽器の音に触れられるようにと考え、沖縄の楽器であるパーランクーと音の愛称が良いと感じられ、教師の身近にあった奄美三味線で、教師が歌う代わりにわらべうたの旋律を弾いてみることにした。子どもたちは初めのうちは三味線が物珍しく、音を聞いたり、教師が弾く姿を見たり、それに合わせて叩くことを喜んでいたが、次第に三味線自体に慣れてくると、三味線よりも、教師が歌いながら一緒に叩く方がより生き生きと楽しい様子であった。これは、三味線の時には教師が不慣れで弾くことが主体になっていたのに対し、歌う時には子どもと視線を合わせ、体の揺れやノリを同調させながら遊ぶことができるため、三味線の時よりも、呼吸や間、リズムや感情等を身体を通して交感することが遊びの楽しさであったからだと考えられる。

このように、3歳児では、仲間と、というよりも、親しみのある教師と一緒に身体を通してリズムを感じたり、呼吸や間を交感しながら遊ぶことが、音を楽しむ上では重要であることがわかった。



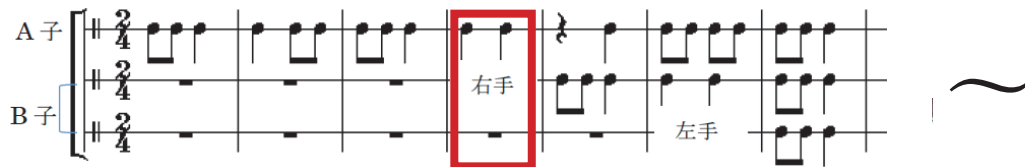
図 9. パーランクーと竹を組み合わせる

## (2) 5歳児の変化と4歳児への影響

5歳児は幼稚園生活の中で4歳児と触れ合う機会が多く、4歳児は5歳児の姿を見て憧れを感じたり、新しいことに挑戦する際のモデルにするなど、様々な影響を受けている。特に「子ども運動会」や「子ども劇場」などの行事の後には学年を超えたつながりや影響が色濃く現れやすい。そこで次に行事の後に見られた5歳児と4歳児の事例を通して子どもたちの間に見られた変化を追ってみたい。

## 1) 事例 1-1 子ども運動会の2週間後に見られた5歳児（2019年10月30日）

10月に入って毎日のように園庭では子ども運動会が行われており、この日も全園児が園庭で運動会の遊びを楽しんでいた。3歳児が園庭中央で演技している間、4.5歳児が周りで応援したり見て楽しんだりしていた時、5歳児B子が足元にある側溝の蓋（鉄製）を石で叩くと「カンカン」といい音がすることを発見した。隣にいたA子もそれに気づき、鉄の蓋を叩き始めると続いてB子も加わり、次のようなリズム奏が始まった。



A子とB子は互いを意識し合いながら、目を合わせたり呼吸を合わせたりしつつ即興的な音楽創りを行った。特にB子は両手に持った石を交差させたり、叩く位置を少しずつずらしたりしながら、より良い音や叩き方を工夫する様子が見られた。



## 2) 事例 1-2 5歳児の様子を見て模倣し始めた4歳児

事例1-1がしばらく続いてA子とB子がお場から離れた後、その様子を見ていた4歳児C子も石で蓋を叩く遊びを始めた。C子は鉄の部分だけではもの足らず、斜め前にあった四角いコンクリートにも目を留め、響きの違いを確かめるようにそれぞれを石で交互に叩き始めた。そして、譜例のように鉄とコンクリートを往復しながらリズム打ちを繰り返した。



C子はその後もコンクリート部分に土を乗せて「こする」など、叩く以外の方法で繰り返し音を模索する様子が見られた。

## 【事例 1-1、事例 1-2 から考えられること】

事例 1-1 から、A子とB子は、身の回りの物に働きかけていい音を探す面白さ、音を見つけたらそれを友達と共有する喜び、リズムを同期させることで高まる一体感などを身につけていることがうかがえる。このような姿の裏側には、運動会のオープニングで取り組んだ空き容器を用いた楽器作りやパレードの経験があり、その楽しさが基盤となってこの活動につながったことが考えられる。

また、事例 1-2 では年長児がしていた音遊びに興味をもった4歳児C子が同じ遊びを始めている。A子やB子のように音やリズムを他者と共有することはなかったが、C子は叩く対象によって音が異なることを発見したり、異なる音を交互に繰り返す面白さ、同じ素材でも「叩く」「こする」など関わり方によって違う音になることなど様々なことを感じ取っている。このようなC子による音の探索行動は、その背景として、楽しんで音と関わる年長児の存在が非常に大きいと考えられる。

### 3) 事例2 音の出し方を教える5歳児と教えてもらう4歳児（2020年2月17日）

2月14日に開催された「子ども劇場」で、年長児が演じた「100かいだてのいえ」は、各シーンごとに劇中の効果音を子どもたち自身が創造した、という点が新しい試みであった。後日、3歳児と4歳児の子どもたちが年長児から招待されて、「100かいだてのいえ」の劇を見る機会があった。その時3歳児4歳児の子どもたちは5歳児の演技もさることながら、それぞれのシーンを盛り上げる楽器にも大いに興味をもった。そして、初めて見る楽器に興味をもった子どもたちは5歳児から楽器の扱い方を教えてもらう機会を得た（写真1）。年長児は「この棒をこうもって、やさしく叩いてみて」などと、4歳児に優しい口調で丁寧に教えている様子が見られた。

#### 【事例2から考えられること】

事例2では、自分たちが体験した楽器との出会いを、自信をもって年下の子どもに教える様子をうかがうことができる。効果音づくりは友達の演技を見てそれにふさわしい音を自分たちで探す作業から始まり、最終的には演技者がよりその役になりきれよう、音を効果的に扱わなければならない。このことは子どもにとってかなり高度な取り組みであるといえよう。しかし年長児はそれを見事にやり切った。幼稚園の生活発表会で子どもたちが劇やミュージカルを演じる際、効果音や挿入歌などは担任教師がピアノ伴奏するのが一般的である。しかし、この大切な作業を子どもたちが相互に担うことにより、音が人の心を動かしたり動かされたりするという面白さを、子どもたちは身をもって体感できたのではないかと考えられる。「こんな音が出したい」という具体的イメージをもって楽器と関わってきた年長児はその楽しさを年下の子どもに伝え、伝えられた子どもは、楽器そのものと楽器から出る音を大切に扱う存在になるものと考えられる。



図 10. 4歳児（左）にオルフ楽器の奏法を教える5歳児（右）

## 5. 音遊びの類型化

ここでは年間を通した子どもたちの音遊びを三つに類型化することを試みたい。音遊びは概ね、①音そのものの探求行為、②音を組織し、他者と合わせる音楽行為、③音楽文化の模倣行為の三つに整理することができる。①の「音そのものの探求行為」は、「音のなるモノ」との出会い、楽器との出会いを重ねながら、年間を通して子どもたちが常に行っていた行為である。音色（音の質感）、音の強弱、音の指向性、音の規則性といったことに気づき、それらに対する自身の好悪を表明、すなわち価値判断をしながら音の面白さを探求した。5歳児の変容でも報告されたように、とくに音色（音の質感）についてはオノマトペによる言語化を試みながら他者と交流していた。

②の「音を組織し、他者と合わせる音楽行為」は単体の音の追求では終わらず、これらを並べたり

重ねたりすることで音を組織化する行為であり、あるいはその発展として他者と音を合わせる行為である。「せーの」の声を掛け合って計画的開始されることもあれば、意図的でなく発生することもある点が興味深い。音遊び（＝①音そのものの探求行為）の場で、ある子どもが音を継続的にならし始めたことに対してほとんど無意識に隣の子どもがそれに音で応える、といった場面も見られた。また他者との協働的な音楽行為は、大学教員による音遊びワークショップや即興演奏の提示の影響を受けていた様子もみられた。

③の「音楽文化の模倣行為」は音そのものの存在とは関係なく成立するごっこ遊びである。コンサートごっこやパレードごっこがそれにあたる。もちろんこれらの遊びは実際には音のない状態で行われることはなく、①や②を含みながら展開される。③の遊びと②の遊びを分けるものは「音がならないモノ」が導入される点にある。コンサートごっこでは音楽文化の周縁のモノとして「チケット」や「お金」が作られ、それらを用いたチケットの「売買」が行われる。また折り紙で「楽譜」や「ピアノの鍵盤」や「トランペット」が作られ、それらは実際に音のなる「カンカン」の太鼓（＝②音楽遊び）と分け隔てなく扱われ「演奏」ごっこが行われる。このように、音楽文化の模倣が目的化すると、その周縁のモノの制作が始まり、音の探求からではなく、音楽文化についての知識に基づいて「楽器」や文化周縁のモノが生み出され、それらが組織化されるのである。

上記に示した①から③は個別に発生する場合もあるが、渾然一体となって子どもの音遊びを構成する場合も多い。例えばカンカンや竹で音の質感の違いに興味をもっていた子どもが（①）、それらを組み合わせてリズムを叩き出す（②）。リズムパターンが固定されてきたときふと思い立ってカンカンと竹の並び方を変える。観察者が「それは何？」と聞くと「ドラム」と答える（③）、という場面があった。もちろんこれら三つは、一つの遊びの中で常に行き来しつつ同時的にも発生する。重要なのは、子どもたちの音遊びを観察するときに、これらの三つの類型を視点として持ち、子どもたちにどのような援助をしていくべきかを考えることであろう。

## 6. まとめにかえて：小学校器楽教育の導入期への示唆

本実践は幼稚園における年間を通した音遊びの実践であったが、音のなるモノから楽器への導入過程を観察したものであり、小学校における楽器導入期に大きな示唆を与える。

第1に、小学校入学時から1年、少なくとも半年間は、器楽教育における楽器の導入は控え、音のなるモノによる音遊びの経験を重ねるべきである。素材による音の違いや奏法による音の違いなどを捉えながらその「モノ」の破損や変形も含めて取り扱いを十分に経験させることは重要である。幼児教育段階でこれを経験していたとしても、小学校入学と同時に「音楽文化」の世界から降りてきた「楽器」を与え、その取り扱いのルールでがんじがらめにすることは避けるべきだろう。幸いにも小学校の音楽教育には創造的音楽学習<sup>5)</sup>に関する過去の蓄積がある。今一度、音の探求と組織化の視点から創造的音楽学習の意義に立ち返り、その中で「音のなるモノ」による音そのものへの興味を広げながら音を構成する経験を児童にさせるべきではないか。その経験の積み重ねの先に、子どもたちの音楽表現への欲求から必然的に音楽文化の所産としての「楽器」を求めるようになるはずである。

第2に、最初に導入される楽器は極力簡易かつ音の美しいものであるべきである。導入期に「音のなるモノ」を用いた音の探求が十分に経験されていれば、美しい音色を持つ楽器への興味はより大き

くなる。小学校の音楽教育で扱われる楽器の音色についてはこれまでも批判されてきた。幼児教育段階と小学校における楽器導入段階の両方で扱う楽器そのものを見直す必要があるだろう。

第3に、楽器導入期にはできる限りたくさんの時間をとって、その楽器でも遊ばせることが必要である。例えば「正しい奏法」や「正しい運指」を最初に、というのが教育界では定石となっているが、そのことが子どもの主体的な表現を引き出すことの障害になっている可能性を考慮すべきである。現在の初等音楽科教育では、指導すべき楽器が先に決められ、それに応じて教科書が構成され、教師は「教科書に掲載された楽曲を1年の間に全て消化すること」をめざして授業を行う傾向にある。教材の消化を目的として行われる、できるだけ早く「正しい奏法」や「正しい運指」を、という考え方は、単なる指導の効率化であり「大人の都合」である。十分な遊びの時間の保障と並行して、大人の側の価値観による「その楽器の名演」や美しい音色の提示をイベントとして挿入し、子どもの側からその楽器の奏法や音色の探求が自発的に生まれてくるよう環境を整えることが必要だろう。

第4に、小学校に入学した途端に「音楽文化」の側のロジックで子どもを統制するのではなく、子どもの音遊びの中にある、「音そのものの探求行為」、「音を組織し、他者と合わせる音楽行為」、「音楽文化の模倣行為」の三つを見極めながら音楽科授業を構成し、それらをうまく「音楽文化の学び」へと統合していくことが必要である。「音の探求」は音色や声色の学びへ、「音を組織」する遊びは創作へ、他者と合わせる音楽行為はアンサンブルの面白さの追求へ、「音楽文化の模倣」は様々な音楽学習を統合する基盤として機能するはずである。

以上はあくまでも今回の幼児教育の現場における実践から提示されうる示唆であり提案である。今後は小学校教育の現場において、楽器導入期の実践を積み上げ、幼児教育の現場と小学校の現場をつなぐ「子どもと楽器の出会い」のあり方を探っていくことが必要である。

### 【付記】

本実践にあたり、京都教育大学附属幼稚園の園児、教員の皆様には多大な協力をいただいた。心より感謝申し上げる。また即興演奏コンサートに「出演」していただいた音楽科増田真結先生、音楽科の学生の皆様にもお礼申し上げます。本実践は、京都教育大学平成31年度教育研究改革・改善プロジェクト経費「幼稚園の音楽活動と小学校器楽教育の接続：『園児と楽器の出会い』のプロセスに着目して」（代表：檜下達也）の援助を受けた研究成果の報告である。

### 注

- 1) 例えば乙部（2016）は、保育現場における音楽活動、とりわけ楽器指導について、「楽器指導が行事の直前に行われることが多く」、そもそも楽器を用いた活動が「毎日の生活の中で行われることが少ない」ことを指摘したうえで、「楽器活動が盛んな園においても、必ずしも子どもの発達に沿った活動が行われているとは言えない」と指摘し、これが「保育者の楽器活動に対する苦手意識を引き出している」と考察している（p.102）。
- 2) 桐原（2019）は幼小連携・接続に関する近年の研究動向として、「幼保側と小学校側の相互観察や

共同実践等」の実施例に「遊び歌やわらべ歌の表現、オノマトペの活用、絵本や自然素材を用いた音楽づくり等」を挙げているほか、接続期の音楽的発達や能力を明らかにしようとする研究として「ピッチマッチング能力」や「音楽的な資質・能力に関する調査」を挙げている。このように見ると、音遊びから楽器遊び、器楽教育へとつながっていくような接続の研究には言及されておらず、その蓄積がこれからであることがうかがわれる。

- 3) 本実践では、ある音楽文化の営みの所産として、音楽を奏でることを目的として作られたモノを「楽器」と呼び、本来は音楽を奏でることを目的として作られていないが人の何らかの働きかけによって音を発生させられるモノを「音のなるモノ」と呼ぶ。
- 4) 京都教育大学平成 31 年度教育研究改革・改善プロジェクト経費「研修コーディネート力育成のための保育キャリア研修プログラム開発」（代表・古賀松香）の一環として行われた。
- 5) 創造的音楽学習（CMM）とは「子どもの主体性や創造性を重視し、多様な音楽様式の追求によって音楽観の拡大を促す学習」とされ、1960 年代から 70 年代に欧米を中心に展開された音楽教育思想である（渡会，2018，223）。その実践は「生活の音から素材を選び、音楽に発展させる」ことや「即興的な表現が中心となった学習展開」といった理念に支えられる（同）。1980 年代以降日本にも紹介され、「平成元年改訂の学習指導要領より『つくって表現する活動』として導入され、現在は「音楽づくり」の活動として展開」されている（同）。

### 参考文献

- 板橋華子（2018）「子守歌感受の特性に見る音楽環境のアフォーダンス：保幼小連携を音楽的アプローチの比較から考える」『紀要』つくば国際短期大学，43，pp.23-36
- 今井香織（2019）「幼稚園教育における音楽活動のあり方：小学校「音楽科」への接続を手がかりとして」『紀要』上田女子短期大学，42，pp.65-75
- 大山美和子（1996）「幼児の音楽表現に関する保育的意味について」『清和女子短期大学紀要』，25，pp.103-110
- 乙部はるひ（2016）「保育現場における楽器導入の仕方を考える：保育者の願いと幼児の発達とのギャップを通して」『帝京平成大学紀要』，27 巻，pp.101-108
- 桐原礼（2019）「校種をつないでの音楽の学び」日本音楽教育学会編『音楽教育研究ハンドブック』音楽之友社，pp.196-197
- 佐野仁美ほか（2016）「『音楽づくり』へつなげる幼児の表現遊び：絵本を用いた実践をもとに」『関西楽理研究』関西楽理研究会，33，pp.15-31
- 文部科学省編（2017a）『幼稚園教育要領：平成 29 年告示幼稚園』フレーベル館
- 文部科学省編（2017b）『小学校学習指導要領解説音楽編』東洋館出版

